



哲學親切に不景氣なし

職業選擇の眼目親切を旨として働け
英雄豪傑の蹟き自分の力相當に發展

左の一語は此程本会或千萬圓に増資した星製業株會社社長星一氏が社日に對しての演説の一節である。一般の参考にもなると思ふから掲げる。(一記者)

△今度の不景氣は

一體何年位も續くものか、戦後に於ける今日の不景氣は、獨逸が賠償を何日如何にして返還するか不明である間、自分にもこれが見當をつけることは出来ないで、不景氣は永く續くものとして凡ての計畫を立てつゝあるが、而かも私は「親切に不景氣なし」といふことを固く信じ、又私の事業もこれに裏書きして呉れるので私は倍々此の信念を強くして努力してゐる次第である。

△一人一業主義を

然らば何故に親切には不景氣が無いかと云へば、畢竟それは奉ずることによつて然るのである。それで先づ職業を選擇するに當つて時代の要求に叶ひ公益に盡すところのものを選ばなければならぬ、そうしてそれは自分が必ず成就し得るといふ確信のあるものでなければならぬ。これ

が一人一業主義の大前提である。自分が成就し得るといふ確信があれば如何なる難問題に遭遇しても氣は怯まな。それは學者に見放された小兒でも自分の力で療さうとする親の心にも似てゐるのである。而も、それが時代の要求に叶ひ

△公益に盡すもの

であるといふことからして大いなる希望が胸中に燃えて、如何なる努力健闘をも惜しない程の勇氣も出て来る、即ち信心深い人が困難にぶつつかればぶつつかる程精神を信ずることが篤くなると同じ心理状態を呈するのである。確信は斯くの如くにして生ずる。斯くの如き確信の上に立つて、微頭徹尾親切を旨として行動すれば、假設其の間に世の誤解を招き反感を買ふことがあつても決して恐るには足りない。勿論、夫等に對しては自から反省もせなければならぬけれども、自分の衷心に於て親切であるならば世の誤解もいつかは解けるであらう。否、或は一生涯解けなくても宜い、其の人は自から

△十字架上の基督

を見て永遠に生きるであらう。斯かる確信を以て自己の職業を勤むものに不景氣など來べき筈がない。

但し仕事を爲るに拙手の考へ休むに似たりと云つたやうな「凝り氣」になつてはよろしくない。先日私が汽車の中で讀んだ幸田博士(露伴)の努力論といふ書の中に「張る氣」と「弛る氣」とに就て面白く書いてあつた。「張る氣」といふのは内に在るもの、外に擴張せんとする氣のことであつて、これは自然的な要求によるものであるから苦痛といふものを伴はない、つまり、病母の爲めに醫師を迎ひに行く時は女子と雖も山中を通るに恐れぬが如きもの、これが「張る氣」である。そこで

△「張る氣」と努力

の差は何かといふと「努力」が力めて氣を張るに對し「張る氣」は自然的に氣が張るといふ差であらうと思ふ。秀吉が小牧山の追目にかゝつても戦争沙汰をせず自分の財をさへ質に出して家康を上洛させ、天下の整理を早めたのは即ちこの張る氣の妙を用ゐたのであると幸田博士は説いてある。此の張る氣は即ち「善からんと欲する心」に基いたものであるが、動もすれば「逸る氣」や「亢る氣」を伴ふといふことであるか

ら吾々は逸らず亢らずに張る氣で以て仕事をしつゝ行くべき度いのである。尤も、「張る氣」の人には「亢る氣」は免れ難いものと見えて、古今の英雄豪傑は大概此の

△亢る氣で蹟く

やうである。これを古人は「亢龍悔あり」と云つたのだが、風船玉も無暗に膨らませると破裂する。要するに己れを知つて飽迄も自分を信じなければ不可ないけれども、餘りに自分をエライと思ひ過ぎて實力以上の事を爲ると過失失敗を生じる。如何なる人間でも神様ではないのだから其の智慧能力は有限な微弱なものである、但だこれが宇宙の理法に従ふた時に偉大となるのである。私は旅行中に永平寺の七堂伽藍を見たが、奥の一段高い所に法堂があつて其の前面の低い所に釋迦堂がある。釋迦様でも宇宙の法の徒弟になつて居られることに就て、從來、眞理の忠僕たることを以て自から任じてゐた私は今更深い感動を覺えたのであつた。そこで吾々は常に眞理の忠僕として智慧を磨き、自分の智慧相應、能力相應に事業の發展擴張も圖らなければならぬ。斯くの如くにして自分の職業を勤んだならば不景氣といふものはあるまいではないか。